

# Alternative Systems Study Bulletin

第12巻第5号

(2004年12月20日)

---

## 外の主体の弁証法（続編）第1回

### 精神現象学の悟性論から自己意識論へ

#### 後記

---

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール [kyw04500@nifty.ne.jp](mailto:kyw04500@nifty.ne.jp)

会費 正会員 : 年間 1口 10万円  
賛助会員 : 年間 1口 3万円  
購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会  
(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

## 外の主体の弁証法（続）

### 精神現象学の悟性論から自己意識論へ

#### 1) はじめに

論文「外の主題の弁証法——『精神現象学』意識論の解説」では、『精神現象学』の感覚的確信、知覚、および力と悟性、までをとりあげ、そこで採用されているヘーゲルの弁証法が、後に完成される意識の弁証法ではなく、これとは逆に、意識関係の両極に主体を見る「外の主体の弁証法」であることを示し、この見地から読みなおすと、ヘーゲルの叙述は非常に理解しやすくなることを明らかにした。その際には、次の自己意識にまで手をつけることはおそらく無理だと考えていた。

ところが、その後、自己と他者の関係についての心理学や社会学の研究書を批判的に検討しているうちに、ヘーゲルが自己意識のところ展開している承認論が、俗流化された形で流布されていることが分かり、外の主体の弁証法の使い手であったヘーゲルが、本当に言いたかったことを発掘しておく必要性を強く感じるようになった。そこで従来のヘーゲル研究についての検討といった作業は抜きにし、原典そのものにあたってヘーゲルの本意を示しておくことにしたい。『精神現象学』の訳文は檜山訳河出書房新社版を採用し、原典のページを示している。

#### 2) 力と悟性における法則論

前回は力と悟性については、超感覚的世界を法則の国と捉える入口までで、考察を打ち切っている。自己意識論に取り組むにあたり、法則、無限、生命を扱っている悟性論の後半部分は不可欠の前提となっているので、力と悟性の後半部分の検討から始めよう。

まずヘーゲルは、「これから後のわれわれの対象は、物の内面と悟性をその両極とし、現象をその媒語とする推理である」（111頁）と述べている。物の内面とは超感覚的世界であり、それは現象としてある。ここでヘーゲルが現象と名づけているものは、普通一般に考えられているような感覚や知覚によって捉えられる実在的な現実のことではなく（これはヘーゲルでは仮象とされる）、感覚や知覚にとって次々と仮象としてあらわれてくるそれらの全体のことであり、だからそれは超感覚的なものであり、物

の内面とされている。

物の内面とは、だから、物という対象を知覚という自我の意識との関係において、互いに反照し合うことで開示されるものであり、ヘーゲルはこの反照を力から説明する。物から出た力が自我の意識に達し、他方それは自我の意識に反照して、物に帰ってくる。対象と自我との関係のうち働いている意識が力の実体であり、そして、この力のたわむれとしてある意識の対象が悟性であったが、このことを明らかにしたヘーゲルには、ここからは、物の内面と悟性を両極とする意識の関係の考察へと進もうとしているのだ。つまり、自我の意識に立脚することから離れて、自我の意識の働きそのものを対象とする「われわれ」（哲学者）の立場から問題を捉えかえそうとしているのだ。

この立場からすると、いまここに対象としてある悟性は、自我の意識が物の内面にまでたどりつく力のたわむれを経験した、というレベルであり、まだ何の内容も持たないものとして生成してきたものだった。そして、そのような悟性と物の内面とを両極とし、現象を媒語として、二つの力のたわむれから力の法則を導き出そうとしてヘーゲルは次のように展開していく。

まずヘーゲルにあっては、力は運動として捉えられており、そして力の概念を捉えるためには、二重の区別を措定しておく必要があった。まず内容の区別で、一方の極は自己に帰った力であるが他方の極は素材の媒体とされていた。もう一つは形式の区別であるが、これは、一方が誘発するもの（能動的）で他方が誘発されるもの（受動的）とされる。

そして、力と悟性の前半部分では、ヘーゲルは外の主体の弁証法を駆使していたわけだから、能動的であり、かつ自己に帰ってくる力を誘発するのは自我（意識）の対象としてある物の方であり、意識は、この力の運動にあっては受動的なものとして措定されていた。

この関係において考えられている「両方の力のたわむれ」とは、まず物の方が力を外化するのだが、そのためには他者（自我の意識）が歩みよって、力が自己自身に帰るように誘発するが、この他者もそれ自身力とされる。対象と自我（意識）の双方に力を見出し、双方の力のたわむれについてヘーゲルは次のように述べている。少し長いが大切なところなので引用しておこう。

「そこで、両方の力のたわむれは、両者が、これまで述べたように規定されていることに存する。つまり、この規定のなかで両者が互いに他に対して在ることに、両規定が絶対的にそのままで交替することに存する、言いかえると、両方の力が自立的に現われるように思われるそれらの規定をもつばら在らせている移行に存する。例えば、誘発するものは一般的媒体として、これに対し誘発されたものは押し戻された力として、措定されている。だが、前者は、他方が誘発された力であることによるのみ、

一般的媒体そのものである。言いかえると、後者はむしろ前者に対し誘発するものであり、前者をそのとき初めて媒体とするのである。前者は、他者によってのみ、自らの規定態を持ち、他方によって、誘発するように誘発される限りでのみ、誘発するものである。それは同じように直接的に、自分に与えられた規定態を失う。なぜならば、この規定態は他方に移行するからである、あるいはむしろ既に他方に移行してしまっているからである。力を外から誘発するものは、一般的媒体として現われるけれども、そのものが、力によってそうするように誘発されるからこそ、そのように現われるのである。すなわち、更に、力は誘発するものを措定する、そしてむしろ自ら本質的に一般的媒体である。力は、このように、自らとは別の規定が自らにとり本質的であるという理由で、すなわち、むしろ力がこの別の規定自身であるという理由で、誘発するものをそのように措定するのである。」(107-108頁)

ここでヘーゲルが注目しているのは、物が持つ誘発する力が外化されて自我に到り、自我の意識がこの力を物に押しかえす、という関係で、物の力は、意識という物の力を誘発させるものの働きで外化されるのであり、この意識の方は力が物に帰っていくように誘発するものだから、この関係にあっては誘発するものと誘発されるもの、という規定態相互の交替が起きる、ということだ。

ここで展開しているヘーゲルの力の弁証法は、物と自我との関係に妥当するだけでなく、単なる物と物との相関関係にあっても妥当する。ところが『精神現象学』のテーマが意識の経験の学であるわけだから、ヘーゲルは、両極が単なる物と物としてある関係ではなく、「その媒介と接触のなかにのみ、両者の在る通りのものがあるような、両極として在る」(109頁)ことに注意を促し、「両契機の本質は、各々が他者によってのみ在るということであり、しかも各々がそれであるとき、そのまま他者によって在るようなものでもはやないということ」(109頁)を確認していく。

こうしてヘーゲルの外の主体の弁証法は、物(対象)と自我(意識)との両極を措定し、両極の合一に知を見ているのだが、しかし、知はまだ一般者ではなく、一般者は一方の極をなしている物の方にあると見ることになるから、ここでの両極の合一は力であり、力の実現が一般性の生成と見ることになる。

「力は、実現されるとき、むしろ、全く別のものに、つまり一般性になっている。この一般性を悟性は、さしあたり、もしくはそのまま力の本質と認める。そしてこの一般性こそ、在るべきはずの力の実在性において、現実的な実体において、力の本質であることが分かる。

われわれが最初の一般者を、力がまだ自分だけになっていないような、悟性の概念として考える限り、その第二の一般者は、今、それ自体に自分だけで現われるような、力の本質である。或は逆に、われわれが第一の一般者を、意識に対する一つの現実の対象であるはずの、直接的なものと考えるならば、第二の一般者は、感覚的に対象と

なる力を否定するものと、規定されていることになる。この第二の一般者は、その真の実在において、悟性の対象としてのみあるような力である。第一の一般者は自己に押しもどかせた力、つまり実体としての力であるが、第二の一般者は物の内面である。概念としての概念と同じものであるような、内面としての、内面である。」(110頁)

物を自我とを力で合一したときに、この合一そのものを意識する意識が悟性であった。このように考えると、物と自我との力による合一を経験するということは、物が意識に対して直接的にあるという知覚のレベルから進み、意識が物の内面のものに直接関係していることになり、「悟性として、二つの力のたわむれを通して、物の真の背景に眺め入ること」(110頁)になっている。

この力のたわむれは、自我に対して次から次へと物の内面を現わされさせ、個々の仮象を生成しつつ、その仮象の全体が現象として悟性によって把握されるわけだ。ところで、仮象は感覚的世界を構成しているが、仮象の全体としての現象は感覚的覚的世界を超えた、超感覚的世界を構成している。では、この超感覚的世界は、悟性にあっては、どのようにして構成されるのか。それが法則である。ヘーゲルは力の弁証法に基づいて、法則の成立を次のように解いている。

「これら二つの側面、誘発する関係とそれに対立する一定の内容の関係は、それぞれそれだけで絶対的な顛倒であり、交替である。だが両方の関係はそれ自身また同じでもある。誘発されたものであり、誘発するものであるという形式の区別は、内容の区別であるものと同じである。誘発されたものそのものは、つまり、受動的媒体であり、これに対し、誘発するものは能動的なものであり、否定的統一もしくは一である。そのために、この運動のなかに在ることになっていた、特殊な二つの力の区別は、とにかく、すべて互いに消えてしまう。というのも、それらの力は、そういう区別だけに基づいていたからである。そして二つの力の区別は、また、前の形式と内容という二つのものの区別とともに一つの区別になってしまう。だから、存在するのは、力でもなければ、誘発するものおよび誘発されるものでもなく、存立する媒体であるような、また自己に帰った統一であるような規定態でもなければ、また、それだけである何かでもなく、いろいろな対立でもない。そうではなく、この絶対的交替のうちにあるものは、一般的区別としての、または、多くの対立が還元されて行ったものとしての区別だけである。それゆえ、一般的区別としてのこの区別は、力そのもののたわむれにおける単一なものであり、このものの真である。この区別こそ力の法則である。

内面または悟性は、単一態に関係することによって、絶対に交替し、この単一な区別となって現われるのである。」(113-4頁)

このところを、「物の内面と悟性とをその両極とし、現象を媒語とする推理」というヘーゲルの問題設定に従って解釈してみよう。まず引用部分の前のところで、二つの力のたわむれを通して、物の内面を意識しはじめることでやっと成立した悟性は、



次のような構成をしている。

次々に仮象を生み出す二つの力のたわむれは、現象によって悟性が物の内面と関係している、ということなのだが、その際現象は悟性の外にありはするのだが、物の内面が現象を作り出す二つの力のたわむれを通して悟性の中味を満たしていく、という形をとっている。

だから、悟性にとっては、二つの力のたわむれが直接的なものとなり、それだけが真なるものとして捉えられるのだが、しかし、誘発する力と誘発される力とは互いに交替しあい、そこに残るのは、一般的な媒体であるか、否定的統一であるかのいずれかであり、そして現われてくるものの唯一の内容であるこの二つの規定が、物の内面と悟性という両極においてお互いに交替しあっている。

このような構成にあっては、一定の形で現われてくる具体的なものは否定的統一によって一般的な媒体へと還元され、そして、否定的統一は現象を一般的なものとすることで、それ自体が一般的な媒体へと転化されてしまう。

誘発するものと誘発させるものという形式上の区別は、一般的な媒体と否定的統一という内容の関係によってその具体性を失い、特殊な二つの力としてあるその質を捨棄されてしまっている。

ここから引用部分に移るが、ヘーゲルは、ここで、特殊性を捨象された一般的な残りものについて、それはもはや力ではなく、誘発するものや誘発されるものではない。それは存立する媒体や、また自己に帰った統一であるような規定態(概念)でもなく、それだけで自存しているものや、いろいろな対立関係でもないとした上で、この一般的な媒体と否定的統一がお互いに交替しあう関係が生み出すものは、一般的区別であり、それは多くの対立が還元されて行ったことで残る区別だと述べている。

この残りのものとしての区別が、力のたわむれにおける単一なものであり、このものの真で、この区別が力の法則だ、ということは、ヘーゲルが力の法則を、多様な現実から種々の対立を捨象し、現象を力関係へと一般化することで成立する単一なものとして見ていたことが判明する。

こうして物の内面と悟性という両極は、媒語である現象における力のたわむれにおいて、両極が絶対的に交替するという経験を通して、単一態と関係している。このように、力のたわむれから、法則を導いたヘーゲルは、現象のうちに法則を発見する科学的思考を悟性の認識のレベルと捉え、その限界を説いている。

「だから、否定もしくは媒介は、一般者においては、一般的な区別である。この区別は、常ならぬ現象の常なる像としての法則において、表現されている。だから、超感覚的世界は諸々の法則の静かな国である。知覚された世界は、絶えず変化することによってのみ、法則を表しているのだから、この法則の国は、知覚された世界の彼岸ではあるけれども、しかしまた知覚された世界のうちに現存しており、この世界の直

接的な、静かな映像である。

法則の国は悟性の真理であり、この真理は、法則のうちにある区別において、内容を持っているのではあるが、同時にそれは悟性の最初の真理にすぎないし、現象を尽くしてはいない。法則は、現象のうちに現存しているけれども、現象を完全に満たさせているわけではない。法則は、状態が変わるにつれて、いつも違った現実をもつ。」

(114-5頁)

ここでヘーゲルが述べている法則の限界は分かりやすい。しかし、次に、この法則論から出発して、法則の国を転倒させた「顛倒した世界」を論じることで無限に到達し、ここから生命論へと進んでいっているのだが、この「顛倒した世界」に到る道筋の理解は難儀である。だが節を改めて、この難題に取り組んでみよう。

### 3) 法則論から「顛倒した世界」へ

まずヘーゲルは法則の概念を与えることから始めているが、その作業は、いま悟性が到達した法則の限界の考察から始まり一般的な法則に移り、最後に法則の内的必然性を述べることで終了している。さしあたり法則の欠陥について次のように展開している。

「法則は、現象のうちに現存しているけれども、現象を完全に現在させているわけではない。法則は、状態が変わるにつれて、いつもちがった現実をもつ。そのため、自分だけの現象には、内面のうちにはないような側面が残っている。言いかえると、現象は、ほんとうのところ、まだ現象としては、廃棄された自分だけの有としては措定されていない。法則の欠陥は法則自身において、やはり現われざるを得ない。法則の欠陥と思われるものは、区別そのものを自らにもっているのに、その区別が一般的であり、不定であることである。だが法則は法則というもの一般ではなく、一つの法則である限り、自ら現実態をもっている。そこで不定な形で多くの法則が現に在ることになる。しかしこの多数態はむしろ欠陥でさえある。多数態は、単一な内面の意識として、それ自体で一般的な統一を真理とする悟性の原理に、矛盾する。それゆえ、悟性は、多くの法則をむしろ一つの法則に集約させねばならない。」(115頁)

この法則論も外の主体の弁証法が適用されている。外の主体は物の内面と悟性、という両極であり、媒語は現象である。法則は力のたわむれとして捉えられた意識の働きにおいて、両極の絶対的交替にもとづく一般的区別への両極の還元ということでもって成立してきたものだった。この法則が、今度は媒語である現象と比較され、その欠陥が示されてくる。最初に成立した法則は一般的区別だったが、これは法則というもの一般の規定であり、一つの法則は自ら規定されたものだから、現実には多くの法

則があることになる。ところがこうした事態は、一方の極が持つ統一という原理に矛盾する。こうして、現象に根ざした法則によって合一されていた物の内面と悟性とは、この合一の内実を変換させていく主体として働くことになる。悟性の働きとは科学的思考の働きであり、それは石が落下するときの法則と天体が運動するときの法則とが一つの法則として理解された万有引力の法則として具体化されている。ところがこの悟性の産物は、もう一方の柱である物の内面を主体として措定すれば、否定されることになる。

「すべての法則を一般的引力（万有引力）のなかで統一することは、法則のなかに存在的なものとして措定されている、法則自体のただの概念以上には、いかなる内容も表現していない。万有引力が言っていることは、すべてのものは他のものに対して不変の区別をもつ、ということだけである。そのとき悟性は、一般的現実そのままを表現する一般的法則を見つけ出したと思ひこむ。けれども、悟性は、実際にはただ法則それ自身という概念をみつけたに止まる。だが、そのとき悟性は、同時に、すべての現実はその自身において法則にかなっている、ということを書き表している。それゆえ、万有引力という言葉は、思想のない表象に、つまり、すべては偶然であるという形で表われ、規定態は感覺的自立性という形式をもっている、と考える表象に向けられている限り、大変重要である。」（115-6頁）

悟性は万有引力の法則で、物の内面の全てが表現できたと思ひ込んでいるが、それは悟性の思いあがり、悟性がなしとげたことは、物の内面は法則にかなっている、ということを書き明かしたことであった。こうして、悟性という極と、物の内面という極をそれぞれ主体とすることで、媒語としての現象は二重のものとなった。そして、現象における二重性が「われわれ」の立場から検討される。

「そこで、一定の法則には、万有引力つまり法則という純粋概念が対立している。この純粋概念が本質、言い換えれば、真の内面と考えられる限り、一定の法則自身の規定態はなお現象のものである、言いかえると、むしろ感覺的存在のものである。法則の純粋概念は、それ自身一定の法則として、別の一定の法則に対立している法則を超えているだけではなく、法則そのものを超えている。いま問題にした規定態は、本来自ら消え行く契機にすぎない。この契機は、ここではもはや実在として現われることができない。なぜなら、現存しているのは真としての法則だけだからである。だが法則の概念は法則そのものに背いている。つまり、法則においては区別自身がそのままつかまれ、一般者のなかに受け入れられているが、そのため、法則が関係を言い表している諸々の契機は、互いに関係なく、自体的に存在する実在として存立している。だが法則における区別のそういう部分は同時に、それ自身一定の側面である。万有引力としての、法則の純粋な概念は、その真の意味においては、次のようにつかまなければならない。すなわち、絶対に単一なものとしてのその概念においては、法則

そのものに現存している諸々の区別は、それ自身また単一な統一としての内面のなかに帰って行く。この統一こそ法則の内的必然性である。」（116頁）

悟性がたてた万有引力、法則という純粋概念と物の内面からくる一定の法則、この対立について、まずヘーゲルは、悟性のたてた法則の純粋概念を物の内面に帰すと、一定の法則自身の規定態は現象として残るが、しかしこれは本来自ら消えていく契機だから、法則の純粋概念は別の一定の法則に対立している法則としてあるものではなく、法則そのものを超えたものになってしまう。こうして両極の合一としてある現象を法則としてつかむこと、そこから得られる法則の概念は、法則そのものに背くことになる。というのも法則として現象を固定化することは、両極の合一する働きを止めることを意味し、関係する契機としてある両極、は互いに関係のないものとされているからだ。そこでヘーゲルは、この合一されたものにおける矛盾を解消すべく、それを単一な統一としての内面のなかに帰っていくことを想定し、そしてこの統一を法則の内的必然性と呼んでいる。そしてこの必然性の考察に移っている。

必然性の考察は、まず法則が二重の仕方で現存していることの確認から出発している。ひとつ目は区別を自立的な契機として表現している法則であり、これは悟性の極から由来している。次は単純に自己に帰っている有という形式であり、これは物の内面の極から発している。この現象という媒語における法則の二重性について、ヘーゲルはさしあたって、関係が肯定的なものと否定的なものとの関係としてある場合（陽電気と陰電気のように）と、運動一般のように、概念と存在とが無関係である場合との二通りについて考えていく。そして、双方において、法則の必然性として通常語られている内実は、単なる言葉か、みせかけのものになっていると指摘する。

「というのも、現象を法則に帰すことは「まだやっと悟性のなかに生じただけであって、まだ事態それ自身に措定されているわけではない」（118-9頁）のだ。それで「悟性が表現しているのは、悟性自身の必然性であるにすぎない」（119頁）ものであり、「つまり悟性は、区別ではあっても、全く事柄自身の区別ではないと、同時に自ら言っているようなふうに区別を立てているにすぎない」（119頁）からだ。

こうして法則の二重性は悟性の運動を意味するものとなり、自我の意識の運動としてあることを意識することで、対象（物の内面）と自我（悟性）という両極は交替によって、自我の内面と自我とが両極になることを経験する。ここでは意識と意識という同名のものが関係しあうことになる。

「つまり同名のもの、力は対立へと分裂し、この対立は、初めは自立的な区別として現われるが、この区別は、実際には全く区別でないことを自ら示すことになる。なぜならば、自分自身から自分をつきはなすものは同名のものであり、このつきはなされたものは同じものであるため、本質的には引き合うからである。こうして、つくられた区別は、区別でないため、また廃棄される。」（121頁）

意識が意識と関係するときに起きる事態は、物の内面のものを自我の意識が対象としていたときの事態とは、すっかり変わったものとなる。後者の場合は先に導かれた「超感覚的なもの、法則の静かなる国、知覚された世界の模像」(121頁)であったが、この第一の世界を転倒した第二の超感覚的世界がここにあらわれてくる。

「法則は一般に、その区別項と同じように、等しいままのものであったが、いまは、両者がむしろ自己自身の反対であることになっている。自己に等しいものは、むしろ自己からつきはなされ、自己に等しくないものは、むしろ自己に等しいものとして措定されている。等しいものが自己に等しくなく、等しくないものが自己に等しいために、実際には、この規定をもつことによるのみ、区別は内的な区別であり、またそれ自身自体的に区別である。」(121頁)

内面を現象自身の法則であると規定する悟性(意識)は、悟性からつきはなされ、そうすることで内面という意識に等しくないものが意識に等しいものとされる。対象についての意識の規定はこれまでは対象の属性とされていたのだが、それがいまでは意識という同名のものとなっているので、対象そのものが意識に等しいという転倒がひきおこされるのだ。

ヘーゲルはこのあと、最初の世界とさかさまになった第二の世界を感覚的に記述することを試みているが、しかしそのやり方は次のように否定され、問題が新たに提出される。

「それゆえ、超感覚的世界の一方の本質となっている顛倒という表象からは、感覚的表象が遠ざけられねばならない。その存立のための異なった場に、区別を固着させている感覚的表象が遠ざけられねばならない。そして、内的区別としての区別というこの絶対的概念が、同名のものとしての同名のものを、自分自身からつきはなすことが、等しくないものとしての等しくないものの等しくあることが、純粹にのべられ、つかまれねばならない。純粹の交替が、言いかえると、自己自身における対立が、矛盾が考えられねばならない。なぜならば、内面の区別である区別においては、対立したものは、ただ二つのもののうちの一つであるのではないからである。そうだとしたら、対立したものは存在するものであって、対立したものではないであろう。対立したものは、一方の対立したものに対立しているのである、言いかえれば、他方は、一方のなかに、そのまま自ら現存しているからである。」(123-4頁)

物の内面と悟性(意識)とを両極とする場合の超感覚的世界と、悟性(意識)を対象とする自我の意識(われわれ)は、後者が意識という同名のものを両極としているがゆえに、両極の合一は、前者とは異なるものとなる。ここでの区別は内的区別であり、同名のものが同名のものをつきはなし、等しくないものにしておきながらそれが等しいものとしてある、という自己自身における対立であるが、それが問題なのだ。ヘーゲルによれば、これは無限としてある、ということだ。

「この無限によってわれわれは、法則が完成されて、それ自身における必然性になることを知り、現象の全契機が内面に受け容れられることを知る。法則の単一なものが無限であるのは、これまでに明らかになったことによれば、(α) その単一なのが、自己自身に等しいものでありながら、自体的には区別であること、言いかえれば、同じ名のものでありながら、自分自身から自分をつきはなし、或は分裂する、ということの意味する。前に単一な力と呼ばれたものは、自己自身を二重化し、自ら無限であることによって、法則である。(β) 分裂したものは、法則において表象とされる部分となるが、自ら存立するものとなって、現われる。部分は内なる区別の概念なしに考えられるならば、重力の契機として現われる、空間と時間であり、距離と速度であるが、それらは、重力自身に対するときと同じように、互いに対し無関心であり、必然性をもたない。それと同じように、単一な重力も両者に対し無関心である。また、単一な電気は、陽と陰の電気に対し、無関心である。(γ) だが、内面の区別という概念によって、時間と空間などのように、等しくないものと無関心なものは、何ら区別のないような区別である、言いかえれば、同名のものの区別であり、その本質は統一である。それらは、肯定的なもの及び否定的なものとして、互いに活を入れ合う。むしろ、両者が在るということは、非有として措定され、統一のなかで廃棄されるということである。二つの区別されたものは共に存立し、共に自体的に在り、共に対立したものとして自体的である、すなわち共に自分自身に対立したものであり、自らの他者を自らにもち、しかもただ一つの統一である。」(124-5頁)

悟性を意識の対象とすることで開けてくる顛倒した超感覚的世界は内的区別を持った無限としてあり、そのことで最初に設定されていた、物の内面と悟性とを両極とし、現象を媒語とする関係は、悟性が無限を経験することで法則を完成し、それ自身の必然性を獲得し、こうして現象の全契機が、内面という外の主体に受け入れられ、物の内面が同名のものの区別であり、その本質は統一であって、自らの他者を自らに持ち、しかもただ一つの統一であるそのような存在者に、ヘーゲルは到達し得たのだった。

#### 4) 無限と生命

無限というと、すぐ、無限大といった数量の問題を念頭においてしまうが、ヘーゲルがここで無限という用語で念頭においてるのは生命だった。そして生命の弁証法を外の主体の弁証法として展開し、そのうえで、無限を意識する意識は自己意識である、としている。まず生命の弁証法から見てみよう。

「この単一な無限すなわち絶対概念は、生命の単一な本質、世界の心、一般的な血液と呼ばれるべきである。これはどこにも現在し、いかなる区別によっても妨げられ

も中断されもしない。むしろ自らはあらゆる区別でありまた区別の廃棄されたものでもある。だからそれは自ら動くことなく、自らのなかで脈動しており、不安定になることもなく、自らのなかで震動している。この無限は自己自身と等しい。というのは、区別があっても同語反復であるからである。つまり区別でないような区別があるわけである。この自己自身に等しいものは、だから自己自身にだけ関係する。自己自身というのは、この、関係の向うものが他者であり、自己自身に關係することは、むしろ二つに分つことであるからである。言い換えれば、今言った自己自身に等しいことこそ、内面的な区別だからである。」(125頁)

さきにヘーゲルは、「われわれ」が悟性を対象とすることによって、同名のものが自分自身からつきはなされる、という経験をする中で、顛倒した世界が開かれ、そこにあるのは自己自身における対立としての矛盾(内的矛盾)であることを指摘し、これは実際には無限としてあることを明らかにしていた。同名のものが自分自身からつきはなされる、という事は、同名のものの区別であり、この場合、二つの区別されたものは、共に自分自身に対立したものであり、自らの他者を自らに持ち、しかもただ一つの統一だから、これは結局は生命の単一な本質だとヘーゲルは主張している。そして、この自己自身における対立としての矛盾の論理をここで展開している。

ヘーゲルの展開の出発点は、無限としてある区別でないような区別である。自己自身に等しいものは自己自身にだけ関係しているが、関係の一方の極は他者なのだから、この場合の自己自身の関係とは、自己自身を二つに分つことになる。関係の一方の極である他者も自己自身に等しいわけだから。

この同名のものが関係のなかで互いに反対のものであるということについて、ヘーゲルは「各々はぜったいに反対ではなく、純粹に自分だけであり、自分のなかにかかるとなる区別をもたない、純粹に自己自身に等しい実在である」(125頁)とし、そしてこのケースについては、この純粹な実在だからどのようにして区別と他者が出てくるかは問う必要がないと述べている。

「なぜならば、既に二つに分つことが起っており、区別は自己自身に同一なものから排除されており、その傍らにおかれているからである。自己自身に等しくあるはずだったものは、だから、絶対的実在的であるどころか、むしろ分たれたもの一つなのである。それゆえ、自己自身に等しいものが、二つに分れるということは、それが既に分れたものとしての自分を、他者としての自分を廃棄していることである。統一については、区別がそこから出てくることのできないものと、言われるのが普通である。が、実際には、統一というものは、それ自身では、分つことの一つの契機にすぎない。統一は、区別に対立している単一態を抽象することである。というのは、統一は、一つの否定的なもの、一つの対立したものであるならば、ほかでもなく、対立を自らにもつものとして措定されているからである。だから同じように、分つことと自

己自身に等しくなることという区別項は、自己を廃棄するという、いま言った運動にほかならない。なぜならば、いま初めて自らを二つに分つと、つまり自らの反対になると、言われる自己自身に等しいものは一つの抽象である、すなわち既に自ら分たれたものであるため、自ら分かつことは自らの分たれた有を廃棄することであるからである。自己自身に等しくなることはまた二つに分つことである。自己自身に等しくなるものは、だから、分つことに対立する、すなわち、自己自身に等しくなるものは、そのとき、自らを一方の側におく、言いかえると、むしろそれは一つの分たれたものとなる。」(125-6頁)

ここでヘーゲルは、生命を無限の運動として捉え、その論理を解明しようとしている。その際、ヘーゲルは、思考の論理と、運動それ自体が持つ論理との相違に気づいている。思考の論理としてある哲学からすれば、実在から分析によって区別と他在を導かねばならない。ところが運動の場合には、区別は自己自身のうちで起こってくるものであり、分析するまでもないことなのだ。

そして、思考の論理との違いは、統一をどう捉えるか、というところで顕著にあらわれてくる。二つのものの統一は、思考にあっては総合であり、分析的抽象に基づく区別を廃棄するが、運動にあっては、統一は区別の契機となっているというのだ。そして、この場合、統一は総合ではなく、抽象となっていて、統一のなかで、二つの区分が、対立を自らに持つものとして措定されているというのだ。自己自身における対立における統一とは、このように、抽象の働きで統一そのものを二つに区分し、区別された自己自身に等しいものをつくり出すことで、自己を廃棄するという運動を無限に展開していく、とヘーゲルは見ている。

自己自身に等しくなること、とは統一だが、この統一が抽象としてあるので、この統一とは二つのものが事態抽象しあっている関係としてあり、ここでは自己自身に等しくなるものにとっては自らの反対という形態を受けとっているのだが、この形態においては、自己自身に等しくなるものは、自ら自分を一方の側におき、一方の極を自己の化身とするのだ。多少、マルクスの価値形態論の論理展開を導入しているが、このような事態をヘーゲルは考えていたのではなかろうか。

「無限、言い換えれば、純粹に自己自身になることのこの絶対的不安定、何らかの仕方、たとえば存在として、規定されているものが、むしろその規定態の反対であるという絶対的不安定、これは、既に、これまで述べたすべてのことの眼目ではあったが、いま内面のものにおいて初めて、自ら自由になって出てきたのである。現象すなわち二つの力のたわむれは、既にこの無限そのものを表わしているが、説明という形で初めて自由に現われる。結局、無限が、それが在るところのものとして、意識にとつての対象となるときには、意識は自己意識である。」(126頁)

生命を無限に続く運動と捉えた場合、この運動は、思考の論理からすれば、すでに



見たように、絶対的に不安定なものだった。悟性はこの無限を説明したが、しかしそれは不安定なものとしてであった。そこでヘーゲルは、この生命の無限の運動を対象とした意識を措定し、これを自己意識と名づけた。

「意識は自己自身に対しては、それは区別されていないものを区別することである。言い換えれば、自己意識である。私は私を私自身から区別する、そしてそうしながら、区別されたものが区別されていないということが、そのまま私に対しては。私という同名のものが、私を私自身からつきはなす。だが、区別されたもの、等しくない措定されたものが、区別されていないながら、そのまま私にとっては全く区別ではない。なるほど、或る他者つまり在る対象の意識は、それ自身当然自己意識であり、自己に帰った有であり、自らの他者における自己自身の意識である。意識のこれまでの諸々の形態にとっては、その真理は物であり、それらの形態とは別のものであった。意識のそういう形態からの必然的進行が言い表しているのは、物についての意識がただ自己意識にとってだけ可能であるというだけでなく、自己意識だけが、それらの形態の真理であるということ、正にこのことである。」(128頁)

先に、無限を意識の対象としたものが自己意識だと規定されたが、ここでは、自己意識という意識の形態そのもののうちに、無限の論理、自己自身における対立があることが指摘されている。この意味で、自己意識だけが、意識形態の真理であるとヘーゲルは述べている。そして、意識から自己意識への移行規定が次のようにまとめられている。

「われわれのみるところでは、現象の内面において悟性が経験するのは、力のたわむれであるような現象それ自身ではないにしても、現象それ自身とは別のものではなく、内面の絶対に、一般的な諸々の契機とそれらの運動としての力のたわむれとである。そのとき実際には悟性は自分自身を経験するだけである。知覚を超えて高まったとき、意識は、現象という媒語によって、超感覚的なものと推理的に結ばれて、現われる。この媒語を通じて意識はその背景を見るのである。二つの極、一方は純粹の内面、他方はこの純粹の内面を觀る内面、この二つはいま一つに合流する。両極が極としては消えているように、両極とは別のものである媒語も、消えている。だから、内面の前にかかっていたこの幕はとり払われ、現に在るのは、内面が内面を見ることとなった。これは区別されていない同名のものを見るのである。この同名のものは、自分自身をつきはなし、区別された内面として措定するけれども、この内面にとってはまた両者が区別されていないことも直接的である。つまりそれは自己意識である。」(128頁)

悟性が対象について見出した現象(ヘーゲルの「現象」とは目に見えるものではなく、超感覚的なものであることに注意)は物の内面であるが、しかしこれ自体意識であり、現象という媒語を通じて物についての意識はその背景にある純粹の内面を觀

る内面と出会い、これは同名のものゆえに、一つに合流してしまう。ここに自我と対象という意識の両極を意識の契機として意識に取り込む、後のヘーゲルの意識の弁証法の萌芽がある。では、自己意識論は意識の弁証法で統一されているだろうか。この点が検証されねばならない。

## 5) 自己意識への移行

ヘーゲルは、意識論のところで考察した、対象についての意識という関係では起こらなかった新しい事態について、「自らの真理と等しいという確信」(132頁)と呼んだうえで、次のように述べている。

「われわれが知の運動を概念と呼び、これに対し、静かな統一としての、すなわち自我としての知を対象と呼ぶとすれば、対象が概念に一致するのは、われわれにとってだけのことではなく、知にとってのことでもあることがわかる。言い換えれば、それとはちがった方法で、対象が自体的にあるものを概念と呼び、これに対し、対一象として、つまり、他者に対するものとして、在るものを対象と呼ぶ場合には、自体存在と対一他一存在とは同じものであることが明らかになる。というのもここでは自体は意識でもあるからである。だがこの意識は、同じように、一つの他者(自体)が相対しているものなのである。意識にとっては、対象の自体と他者に対する対象の存在とが同じものであるということがある。自我は関係の内容でありまた関係そのものである。自我は、他者に対して自我自身であると同時に、やはり自我に対して自我自身であるにすぎないようなこの他者を、覆っている。」(133-4頁)

ヘーゲルによれば、対象についての意識が悟性において無限なものとなり、そして、この無限なものを意識の対象とするとき、それが自己意識だった。双方とも意識である、という点で区別のない、同名のものだが、しかし、そこにも区別、つまり他者を見出すことはできる。例えば、知の運動を概念と呼び、自我としての知を対象と呼ぶように。この場合、対象が概念に一致するという事は、双方が意識である、ということによって裏づけられる。

他方で、これとは別の仕方で、対象自体の概念を想定し、これに対して他者としてある自我を対象と呼ぶ場合も、対象自体も意識であるから、対象自体とその他者とが同じものとなる。

ここでヘーゲルは、自我は関係の内容であり、また関係そのものである、と述べている。自己意識は、自我が自我としての知を対象とする意識に他ならないから、自我が一つの関係となるが、自我の他者の極は自我としての知であり、他者の極からすれば自我は自我自身となり、両極は自我に覆われている、というのだ。これは、力と悟



性のところで悟性にとってあらわれた自己自身における対立としてあった無限と同じ論理構造をしている。つまり「自己意識は、自己意識としての運動ではあるが、自己自身としての自己自身を、自己から区別するにすぎない」(134頁)というわけだ。

この後、ヘーゲルは自己意識が無限なものとして運動するものである、ということから、この運動における統一が欲求に基づくものであり、さらに自己意識の運動の極が生命となると展開していく。

「自己意識の現象とその真理のこの対立は、だが、自己意識と自己自身との統一という真理だけを、その本質としている。この統一は、自己意識にとり本質的なものにならなければならない。すなわち、自己意識は、もともと、そうならなければならないという欲求なのである。これからは意識は、自己意識として、二重の対象をもつことになる。その一つは直接的な対象、つまり、感覚的確信と知覚との対象であるが、これは自己意識にとっては、否定的なものという性格で表わされている。もう一つはつまり自己自身である。これこそ真の実在であるが、さしあたっては、やっとまだ第一の対象と対立して現われているだけである。ここで自己意識は運動として現われるが、この運動において対立は廃棄され、自己意識にとり自己自身と自己の等しいことが生じてくる。

対象は、自己意識からみると否定的なものであるが、意識の側が自己に帰っているように、対象の側も、われわれにとって、或は自体的には、自己に帰っている。対象は、このように自己に反照することによって、生命となっている。自己意識が存在するものとして自分と区別しているものも、存在するものとして措定されている限り、ただ感覚的確信や知覚という姿を自分にもっているだけではなく、自己に帰った有である。そして直接的欲求の対象は生命あるものである。」(135頁)

自己意識のうち、意識という契機は感覚的世界や知覚的世界から反照したものであり、自我とは区別された契機としてあるが、しかし、これは同時に自我としての知としてあり、この意味では自己意識の自己自身との統一に関係している。こうして、自己意識には自我としての知=現象という契機と、自己自身との統一という真理とが含まれているが、ヘーゲルは、自己意識を真理を追究する欲求であることに注目する。

そうすると、自己意識という新しい知の形態は二重の対象をもつことが明らかになる。一つは直接的な対象、つまり感覚的確信と知覚との対象であるが、しかし、この対象も、自我としての知、という否定的な形で表わされている。もう一つは自己自身であり、これが欲求を持つ実在である。この同名のものの論理展開は無限としてあり、運動として現われ、この運動において対立は廃棄されて、自己意識にとり、自己自身と自己の等しいことが生じてくる、というわけだ。そして、この自己意識にとっての真理への欲求は、同時に対象にとってみれば、自体的に自己に帰ったことを意味しており、自己意識にとっては否定的なものとしてあった、直接的な対象自体も自己に反

照することによって生命となるというのだ。

## 6) 自己意識論における生命

ヘーゲルは力と悟性で述べられている無限の論理をわきまえ、自己意識論ではそれを生命論として展開している。

「生命の本性の円環は次のような契機を含んでいる。その実在(本質)はすべての区別を廃棄している有としての無限であり、軸回転する純粋な運動であり、絶対不安な無限としての自己自身の安定であり、運動の区別項を自分のなかで解消させている自立的自身であり、このように自己自身と等しいことのうちに、空間の充実した形態をもっている、時間の単純な実在である。だが区別項は、この単一な一般的媒体にありながらも、やはり区別項として存在する。というのは、この一般的流動が自ら否定的本性をもっているのは、この区別項を廃棄するからこそであるが、もし区別項が存立しないとすれば、それらを廃棄することはできないからである。この流動態こそは、自己自身に等しい自立性として、自ら存立し、区別項の実体である。だから、そこに区別項は区別された項として、自分だけで有る部分として存在する。だから存在はもはや存在を抽象するという意味をもっていないし、条項の純粋本質態も一般性を抽象するという意味をもっていない。かえって、条項が在るということは、正しく、自分自身のなかでの純粋な運動の例の単純な流動的実体である。だが、これらの各項相互の区別は、もともと区別としては、無限、すなわち、純粋運動自身の各契機が規定されているより以外の仕方、規定されているのではない。」(136頁)

すでに無限の論理を外の主体の弁証法として解説したあとでは、ここでの生命論も理解に困難はない。すべての区別項を廃棄している有としての無限、ということは、思惟による抽象の産物として区別があるのではなく、同名のものの関係のうちで形成されている区別項であり、それは廃棄されることで運動をつくりだしている流動的な実体なのだ。ヘーゲルはひきつづいて、この論理そのものを抜き出している。

「自立的な諸々の項は自分だけで在る。が、この自分だけの有はむしろそのまま統一に反照することでもあり、またこの統一は自立的な諸々の形態に分裂することでもある。統一は、絶対に否定的なつまり無限な統一であるから、分裂する。そして統一が存立するから、区別もこの統一においてのみ自立するのである。形態のこの自立性は一定のもの、他者に対するものとして現われる。というのもこの自立性は分裂したものだからである。この限りで分裂の廃棄は他者によって起る。しかし廃棄は自立性そのものにも在る。なぜならば、例の流動性こそは自立的な形態の実体であるからである。が、この実体は無限である。だから形態は、その存在自身において分裂である、

つまり自分だけの有を廃棄する。」(136頁)

ヘーゲルが論理学で展開する意識の弁証法であれば、ここで述べられている「自立的な諸々の項」、としてある区別項は意識という統一物の契機であり、非自立的なものとして扱われてしまう。しかし、外の主体の弁証法からすれば、統一は関係としてあるだけで、関係の両極が主体とされる。だから運動をつくり出している流動的な実体である区別項は自立的なものであり、自分だけであることになる。そして、自己意識論や生命論にあつては、両極が同名のものとなっているから、統一とは、同名のものの関係であり、同名のものが自立的な諸々の形態に分裂することとして捉えられる。もちろん、ここで自立的といっても、無媒介な自立ではなく、関係(統一)のなかでの自立であり、そして形態の自立性は、同名のものの他方の極としてある他者に対するものとしてある。

これはなかなか興味のある論点だ。ヘーゲルはここで、生命や無限を同名のものの関係として捉えることで運動の論理を示そうとしているのだが、これを関係における両極の規定と捉えると、同名のものの関係が、この関係のなかでは、区別を自立させて自立的な形態を生み出し、他者に対置させると読めるからだ。ヘーゲルは運動の見地から見ているから、自立的な形態が廃棄されることに重点をおいて論を展開している。それで、これ以降に展開されているヘーゲルの生命論を、運動過程としてだけではなく、形態論の観点からも見ておくことが必要となる。先の引用部分に続いて、ヘーゲルは次のように述べている。

「われわれが、ここに含まれた契機にもっと詳しい区別を立ててみると、第一の契機として、自立的な諸々の形態の存立していることがわかる。すなわちそれは、詳しく言えば、自体的には在りもしなければ、存立してもいないという、区別作用それ自体であるものを、抑圧することである。だが、第二の契機は、前の存立を区別の無限性に隷属させることである。第一の契機のうちには存立する形態がある。その形態は自分だけで有るものとして、また規定されていながらも無限の実体として、一般的実体に対抗して現われ、この流動性と、この実体との連続とを否定して、この一般者のなかで解消しているのではなく、自分のこの有機的でない自然から分かれ、これを食い尽くすことによって自分を支えるものだと主張する。一般的な流動的な媒体のうちにある生命、すなわち二つの形態がばらばらになっていながら安定している姿が、正にそのことのために、形態の動揺となり、過程としての生命となる。単一な一般的流動は自体であり、形態の区別は他者である。だがこの流動はこの区別によってそれ自身他者となる。なぜなら、そうなったいま、流動は区別に対しては、区別はそれ自体に自分で在り、そのため限りなく動き、この運動によって前の静かな媒体は食いつくされる。そういう意味で流動は生きたものとしての生命となる。」(137頁)

ヘーゲルは、ここで、関係として統一されている場における両極の分析に移ってい

る。一方の極は自立的な諸々の形態の存立であり、他方の極は前の存立を区別の無限性に隷属させることである。その際に、この統一としてある関係が同名のものの関係であり、無限としてあることから、第一の契機のうちにある存立する形態は、同名のものである一般的実体という第二の契機に対抗し、これを食い尽くすことで自己を支えようとしている。存立する具体的な形態と一般的実体という二つの形態がばらばらになって安定している姿は、一般的な流動的な媒体のうちにある生命なのだが、これは形態の動揺をへて、過程としての生命となる。というのも一般的実体に対抗してこれを食い尽くそうとすることで、自立的な形態は一般的流動という自体となり、形態の区別を他者に転じ、自らを一般的実体に転化することで第一の契機の他者となっているからだ。このようにして、第一の契機としてあった形態の区別は、一般的な実体を食いつくし、両極の媒体としてある流動は、生きたものとしての生命となる、というのだ。ひきつづいてヘーゲルは述べている。

「だが、それゆえにこそ、この顛倒はまだそれ自体自身において顛倒態である。つまり、食いつくされるものは実在である。一般者を犠牲にして自己を維持し、自己自身との統一の感情を得た個別態は、正にそのために、自分を自分だけのものたらしめている他者との対立を、廃棄する。個別態が自らに与える自己自身との統一は、両方の区別が流動することである。すなわち、両方が一般的に解体することである。だが逆に、個別的存立を廃棄することは、また、それを生み出すことである。なぜならば、個別形態の実在、一般的生命、自分だけの存在者は自体的に単一な実体であるから、他者が自らのうちに措定されると、自らこの単一態??実在を廃棄する、すなわち、単純態を分裂させる。そして区別のない流動をこのように分裂させることこそ、個別態を措定することである。だから、生命の単一な実体は、自己自身を二つの形態に分つと同時に、これらの存立する区別を解消させる。」(137頁)

ヘーゲルはここで、過程としての生命に即してその論理を記述している。個別的なものが一般的なものを犠牲にして自己を維持し、そのことによって自己自身を統一すれば、これは他者を廃棄したことになり、両極を一般的に解体することになるが、しかし、個別的存立をこのように廃棄することは、またそれを生み出すことになる。というのも、個別的形態を実在させる、ということは、個別的なものの中に一般的なもの、という他者を措定し、そうすることで、自らを分裂させることになるからだ。こうして、生命という単一な実体は、自己自身を二つの形態に分つと同時に、これらの存立する区別を解消させる、というのだ。ひきつづきヘーゲルは次のように述べて、生命についての規定を終えている。

「分裂を解消させることはまた同じように分裂させることである。つまり項に分けることである。そこで、区別された、全運動の二つの側面、つまり、自立性の一般的媒体のなかで、鮮やかに離されていた形態化と生命の過程とは、互いに帰入し合う。

後者、つまり生命の過程は、形態を廃棄すると同じように、項を廃棄する。流動する場は、それ自身実在を抽象することであるにすぎない。言いかえれば、その場は形態としてのみ現実的である。この場が項に分れることは、分けられた項をまた分けること、すなわち、分けられた項を解体することである。この循環過程の全体が生命をつくっているのである。すなわち、初めに言われたもの、つまり、生命の実在の直接的連続と充実でも、存立する形態と自分だけで有る別々のものでも、形態の純粋な過程でも、なおまたこれらの契機の単一な総括でもなく、自ら展開しながら、その展開を解体し、この運動のうちに単一に自己を維持する全体、これこそは生命である。」(138頁)

このように述べたあと、ヘーゲルは、生命の統一した運動を類と捉え、これを類と捉える意識を自己意識とみなしているが、これらについての検討は次回の課題としたい。

## 後記

今回は、以前に書いておいたヘーゲル論を掲載します。3年前に書いた「外の主体の弁証法」が、田畑さん編集の『唯物論研究』に2回に分けて掲載されることになり、その原稿を最終校正したついでに、続きを書いてみたのです。自己意識論の新しい解釈が目標ですが、その準備作業としては上手くいったのではないかと考えています。あと時間が空いたときに続きを書いてみようと思っています。

イタリア研修旅行はいろいろ成果がありました。報告はサポートセンター通信でとりあえず行いましたが、いずれ本誌でも行います。

イタリア旅行中にモモの本の後半部分の書き直しをする腹を固めたことで、今書き直して頭がいっぱいです。テーマは、時間とおかね、と時間貯蓄銀行の歴史の変遷ですが、原始社会から現代までの時間意識の変化とか、都市の歴史とか、生産様式の変化などを調べる必要があってちょっと手間取っています。

表さんとの共同研究会は、情況編集部とタイアップして行うことにしました。その第1回目の公開講座は1月23日(日)午後1時より、藤本和貴夫さんに講演をお願いしました。ロシアについての面白いお話が聞けるとおもいます。場所は京大会館です。奮ってご参加ください。また市民文化講座のほうは1月22日(土)で、テーマはコミュニティビジネスです。